

家庭園芸に関する研究

2. 鹿児島市民農園について

松尾 英輔

(観賞園芸学研究室)

昭和53年8月30日 受理

Studies on the Amenity Horticulture in Japan

2. On the Shimin-Noen (Residents Farm) in Kagoshima

Eisuke MATSUO

(Laboratory of Ornamental Horticulture and Floriculture)

緒 言

植木市やデパートの園芸コーナーの大繁昌、園芸に関する TV 番組の高い視聴率、公団住宅なみに高倍率の申し込みが殺到する貸農園、週刊誌の園芸特集などの諸例にみられるように、都市を中心として家庭園芸がブームを呼んでいる。

鹿児島市においても、春秋恒例の木市は年を追って盛んになり、1977年春からはあらたに植木まつりが木市とほぼ同じ時期に開催され、こちらも回を追うごとに盛会の度をましている。これらとも関連して、園芸に対する市民の熱意は高い。たとえば、さまざまな種類のアイディア鉢が利用され、屋上や塀の上にも植物が置かれ、街路の側溝の上だけでなく、一部には路上にまではみだして鉢物を置いている例をもみることができる。

このような状況の下で、昭和52年度から鹿児島市民農園が開設されることになった。これは、鹿児島市が農園を開設し、市民に無料で貸し出して農作業を体験してもらおうというものである。

先に述べたような都市における園芸ブーム、そしてそれに必要な土地をもたない、あるいはそれに近い市民が、この市民農園をどのようにとらえ、どのように活用してゆくのであろうか。また農園開設の意図するところは十分達成されているといえるのだろうか。

著者は先に「アイディア鉢」とおして、市民の園芸活動の一端を明らかにしてきたが、ここでは市民農園における市民の園芸活動とその反応をとおして家庭園芸の本質を解明する試みを行った。

調査方法

1. 市民農園の利用状況と栽培植物について

まず開園半月後を含めて、開園後ほぼ1か月ごとに利用圃場数、栽培植物およびその栽培面積を調査した。その結果は、植物の出現頻度 (Frequency of Appearance) を 151 圃場のうちその植物が栽培されている圃場数 (面積の多少を問わない) の比率で示し、栽培面積については、栽培面積のもっとも多い植物に評点4を与え、以下2位3点、3位2点、4位以下1点とし、植物ごとにその合計点数によって表わし、これを栽培度 (Degree of Cultivation) として示した。また随時入園者にインタビューを行った。

2. アンケート調査

1978年3月下旬、農園が閉園される前に、入園者に対してアンケート用紙 (Fig. 1. 市民農園に直接関係しない部分は省略) を送付し、郵送方式によってこれを回収した。4月15日までに、入園者151世帯のうち122世帯から回答をえた。

なお、本文中「」内の引用句はインタビューおよびアンケートの回答にあらわれた入園者や関係者の発言であり、字上点は著者が付したものである。

結果および考察

1. 市民農園およびその耕作の概要

市民農園は、農林省が昭和52年度から始めた“農業と食糧を見直す事業”の一環として、人口30万人以上の都市をもつ府県を対象に行われる“消費者農業体験事業”の場であり、もちろん鹿児島市では初めての試みで、他には千葉市、甲府市、山梨県竜王町で行わ

- ご家族のなかで中心となって市民農園の耕作をなさった方におたずねします。
- 問1 まず性別とお年をおたずねします。
性別 (1 男 (2) 女) 年齢 () 才
- 問2 自宅から市民農園までどれくらいの時間がかかりますか。
1 徒歩で (/) 分ぐらい
2 自家用車で
3 バス(電車)と徒歩で
- 問3 畑仕事はじめてですか。
① はい 2 いいえ
- 問4 市民農園ではどんなものをつくられましたか。(あてはまるものすべてに○印で開んで下さい)
① ダイコン ② ハクサイ ③ ハネギ ④ レタス ⑤ センモト
⑥ ホウレンソウ ⑦ シュンギク ⑧ カブ ⑨ タカナ ⑩ キヤベツ
⑪ ニンジン ⑫ ニンジン ⑬ パセリ ⑭ ツラメ ⑮ カリフラワー
⑯ フダンソウ ⑰ ハゴタマ ⑱ ニラ ⑲ エンドウ ⑳ グロッコリー
㉑ セルリー ㉒ 休菜 ㉓ 京菜 ㉔ 小松菜 ㉕ ハンカダイコン
㉖ その他 ()
- 問5 作物のできはいかがでしたか。
1 よくできた ② まずまず 3 できなかった
- 問6 どんな障害や問題がおこりましたか。
1 虫に食べられた 2 病気が多かった ③ 肥料がたなかった
4 干ばつの害を受けた 5 その他 ()
- 問7 かねてどんな作物をつくってみたいと思っておられますか。三つあげて下さい。
1 () 2 () 3 ()
- 問8 市民農園を耕作してどんな点がよかったですか。(あてはまるものすべてに○印をつけて下さい)
① 知り合いがあえた ② 野菜を買う量が少なくなった。
③ 健康によかった ④ 野菜づくりのむつかしさを知った。
5 その他 ()
- 問9 市あるいはその職員の手引についてどんなことを希望しますか。(あてはまるものすべてに○印をつけて下さい)
1 指導してくれなくてよい。 2 従来のものでよい。
3 日曜・祭日も指引してほしい。 4 種子をもっと配布してほしい。(有料 無料)
5 苗をつくってほしい(有料 無料) 6 野菜以外のものもつくらせてほしい。
7 その他 ()
- 問10 農園の面積は
① 現在のままでよい 2 もっと広い方がよい 3 もっと狭い方がよい
- 問11 もし許されるならば、次回も申し込みたいと思いますか。
① はい 2 いいえ
- 問12 市民農園に申し込みされた理由をお書き下さい。
()
- 問13 市民農園を耕作されてのご感想・ご意見を自由にお書き下さい。
()
註 問14以降はお家での園芸についておたずねするものです。
- 問14 お家でも園芸をやっておられますか。
① はい 2 いいえ

Fig. 1. Sample of the questionnaire and answers. Questions 15~25 were omitted because they were not directly concerned with the Shimin-Noen (Residents Farm).

れた。

鹿児島市民農園の実情は次のとおりである。市は県の委託により、市内3か所(いずれも市の中心部から約1時間以内)に土地を借りて農園をつくった。1農園の広さは約20a。このなかに1区画20m²の圃場50~51を設置し、その他のスペースは通路、駐車場、肥料置場のほか、格納庫(6m²)、便所、水道(1か所)および水槽(合成樹脂製500lタンク2個)の設置にあてられた。格納庫に備えられた農具は立クワ3、草とりクワ1、スコップ1、レーキ1、カナミ(ザル)3、パケツ3、ジョロ3、カマ2であった(Fig. 2)。

昭和52年度には三つの農園(伊敷農園、谷山農園、吉野農園)をあわせて151圃場が市民に無料で貸し出された(1世帯1圃場)。入園資格は農家でない市民。入園期間は年度内に限られ、したがって開園された10月13日から翌年3月25日まで約半年であった。

栽培植物については「入園期間中に終る作物」と案内されたが、市民からの問合せで農林省に伺いをたてた結果、「野菜はよろしいが、花はつくってはいけない」と口頭で付け加えられた。

市民農園入園者の公募は報道機関に発表されただけで、市から市民への情報源となっている「かごしま市民のひろば」には載らなかったにもかかわらず、わずか3日間(10月3~5日)という短い申し込み期間中に275名の申し込みがあった。10月7日公開抽選によって各圃場ごとに入園者が決定された。入園決定後に辞退を申し出た人は開園後の分も含めて10名であった。辞退の理由は「交通の便が悪い」、「高齢で耕作できない」、「仕事の都合で耕作できなくなった」からで、辞退者の農園は補欠入園者にゆずられた。

10月13日それぞれの農園で開園式(Fig. 2-2, 3)。出席した入園者は合計140名であった。入園式では施設や農具の利用、係員の巡回などについて説明がなされた。たとえば、水道や格納庫は土・日曜日(含祭日)に開くこと、これらの鍵は管理人(地主)が保管すること、係員の巡回は平日に行うことなどである。

入園者には、「秋冬やさいの作り方例(鹿児島市経済局農林部発行)」というパンフレットとともに、これに記されたダイコン、半結球ハクサイ、ホウレンソウ、シュンギク、タイサイ、タカナのなかから任意に2種類を選んでそれぞれ1袋(市販用)ずつが無料で配布された。また、山積みの堆肥が入園者の利用に供されたが、均等割の配布でなかったため、遅かった人は利用できない事態が生じた。なお、開園当日、農具、種苗、肥料を準備してきた入園者も多かった。

開園後の未利用圃場、途中で放置された圃場の数は10月28日7、11月14日3、12月14日2、1月14日0、2月18日2、3月15日15ときわめて少なかった。年内の場合には主に「忙しかったから」との理由で未耕作、2月以降では「肥料をやって手入れをしても収穫できないからもったいない」、「肥料を入れても次の人が得するだけでアホらしい」から放棄する例もあり、とくに3月には後者が著しく増加した。しかしこれとは対照的に「3月末までに収穫できるものをつくれればよいから」と、2月になっても耕作に精を出す人も多かった。このような入園者は農作業の経験をもった人らしく、その出来ばえもみごとな例が多かった。このように若干の未耕作者はあったものの、一般に入園者はきわめて熱心であり、近くの入園者は「ほとんど毎日朝晩見に来ます」といい、近くに圃場をもつ地主も入園者の熱心さを認めていた。もっとも、雨の直後に灌水する



Fig. 2. Snap shots of the Shimin-Noen (Residents Farm).

1. Information board, 2. and 3. Photos shot on the opening day, 4. Store, 5. Tap and tank, 6. Note, 7. and 8. Cultivated plants on the farms.

初心者もみられた。

畝立ての方向は入園期間を通じてほとんど変化なく、東西方向 110 園、南北方向 32 園、混合 9 園と、東西方向の畝立てが圧倒的に多かった。これには農作業経験者が約 60% にものぼり、初心者は経験者に教わったり、見よう見まねで耕作したことが大いに関係しているようである。

入園期間中に栽培された植物の種類数は 42 (Table 1)。このうち 16 は草花であったが、出現頻度や栽培度はごくわずかであり、野菜が圧倒的に多かった。

栽培植物数を月毎にみると、32~34 とほぼ一定であった。

1 圃場当りの栽培植物数は 4~6 の例がもっとも多かった (Fig. 3)。なかには 10 種類以上の植物を植えた入園者があった (最多 14 種類) が、これらはほとんど初心者で、栽植密度も超過密であった。経時の変化をみると初期と末期には植物数はやや少なかった。

出現頻度および栽培度のいずれの面でも群を抜いて多かった植物は、ダイコン、タカナ、ホウレンソウ、ハクサイであった (Fig. 4)。これには、開園にあたって

Table 1. All plants*1 cultivated on the Shimin-Noen (Residents Farm) and classifications

| Name | Japanese name | Classification*2 |
|----------------------------------------------------------------------------|----------------|------------------|
| 1. <i>Raphanus sativus</i> L. | Daikon | V |
| 2. <i>Spinacia oleracea</i> L. | Horenso | V |
| 3. <i>Brassica juncea</i> Czern. et. Coss. var. <i>integrifolia</i> Sinsk. | Takana | V |
| 4. <i>Brassica pekinensis</i> Rupr. | Hakusai | V |
| 5. <i>Chrysanthemum coronarium</i> L. | Shungiku | V |
| 6. <i>Allium fistulosum</i> L. | Negi | V |
| 7. <i>Brassica</i> spp.*3 | Tsukena-rui | V |
| 8. <i>Lactuca sativa</i> L. | Retasu | V |
| 9. <i>Brassica oleracea</i> L. var. <i>capitata</i> L. | Kanran | V |
| 10. <i>Allium wakegi</i> Araki | Wekegi | V |
| 11. <i>Brassica oleracea</i> L. var. <i>botrytis</i> L. | Hanayasai | V |
| 12. <i>Brassica rapa</i> L. | Kabu | V |
| 13. <i>Daucus carota</i> L. | Ninjin | V |
| 14. <i>Raphanus sativa</i> L. var. <i>radicula</i> Pers. | Hatsuka-daikon | V |
| 15. <i>Pisum sativum</i> L. | Endo | V |
| 16. <i>Allium sativum</i> L. | Ninniku | V |
| 17. <i>Beta vulgaris</i> L. var. <i>flavescens</i> DC. | Fudanso | V |
| 18. <i>Brassica oleracea</i> L. var. <i>acephala</i> DC. | Habotan | O |
| 19. <i>Calendula officinalis</i> L. | Kinsenka | O |
| 20. <i>Allium cepa</i> L. | Tamanegi | V |
| 21. <i>Dianthus</i> sp. | Nadeshiko | O |
| 22. <i>Petroselinum sativum</i> Hoffm. | Paseri | V |
| 23. <i>Brassica japonica</i> Sieb. | Kyona | V |
| 24. <i>Allium odorum</i> L. | Nira | V |
| 25. <i>Vicia faba</i> L. | Soramame | V |
| 26. <i>Centaurea cyanus</i> L. | Yagurumaso | O |
| 27. <i>Antirrhinum majus</i> L. | Kingyoso | O |
| 28. <i>Dianthus caryophyllus</i> L. | Kaneshon | O |
| 29. <i>Anemone</i> sp. | Anemone | O |
| 30. <i>Freesia refracta</i> Klatt. | Furijia | O |
| 31. <i>Iris hollandica</i> hort. | Oranda-ayame | O |
| 32. <i>Helichrysum bracteatum</i> Willd. | Mugiwaragiku | O |
| 33. <i>Ranunculus asiaticus</i> L. | Ranankyurasu | O |
| 34. <i>Papaver rhoeas</i> L. | Hinageshi | O |
| 35. <i>Tulipa gesneriana</i> L. | Tyurippu | O |
| 36. <i>Phaseolus vulgaris</i> L. | Ingen (Saito) | V |
| 37. <i>Allium bakeri</i> Regel. | Rakkyo | V |
| 38. <i>Apium graveolens</i> L. var. <i>dulce</i> DC. | Serori | V |
| 39. <i>Perilla frutescens</i> Britton var. <i>crispa</i> DC. | Shiso | V |
| 40. <i>Narcissus</i> sp. | Suisen | O |
| 41. <i>Platycodon</i> sp. | Kikyo | O |
| 42. <i>Bellis perennis</i> L. | Deizi | O |

N.B. *1 Plants are listed in order of the frequency of their appearance.

*2 V; vegetables and O; ornamental plants.

*3 They included *Brassica chinensis* L. (Shakushina), *B. juncea* Czern. et Coss. (Karashina), *B. rapa* L. var. *perviridis* Bail. (Komatsuna) and *B. pekinensis* Rupr. (Hiroshimana).

これらの種子が配布されたことも関係していよう。しかしダイコン、ホウレンソウ、ハクサイなどは収穫後にもたびたび播種されていたことを考えると、これらは冬作物として代表的な野菜であり、かつ栽培しやすいことが多く栽培されたより大きな理由であろう。

出現頻度および栽培度それぞれについて、もっとも多い植物10種類の経時変化をみると Fig. 4 のとおりであった。

作柄は全般的に良好で、市の係員も驚くほどであ

った。

その他特筆すべきことは、圃場の土を持ち帰る例があったことである (Fig. 2-6)。家庭園芸用の土を「車で山に掘りにゆく」、「田舎に帰ったときもらってくる」例ともあわせて、市街地の住宅に土が少なく、貴重になってきたことが示されている。

2. アンケート調査にみる市民の反応と家庭園芸の本質について

1) 市民農園耕作者の性別と年齢 (問 1, Table 2)

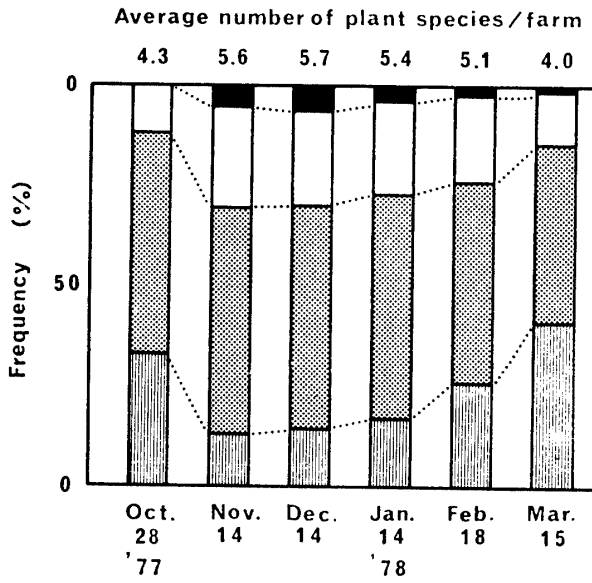


Fig. 3. Changing of the number of plant species cultivated on the Shimin-Noen (Residents Farm).
 Number of plant species: Striped column; 0-3, dotted column; 4-6, white column; 7-9, and black column; more than 10.

性別にみると女性よりも男性がやや多く、年齢別に

みると、40代が最多で、30代がこれに次ぎ、一般的にいえば、男女を問わず農園は老年層よりもむしろ壮年層によく利用されていた。これは家庭園芸の調査¹⁾でも指摘されているように、現代の園芸がかってのような老人趣味とは異なったものになってきていることを示すものといえよう。

2) 農園への交通および所要時間 (問 2, Table 3)

自家用車の利用がもっとも多く、また所要時間30分以内の人が圧倒的に多かった。徒歩で数分以内の入園者の場合、「朝夕の手入れが容易であり」、「開園当初のひでりのときにも十分に水やりができた」結果、荒れた圃場は少なく、作物のできも上々の部に属した。遠距離入園者の場合、「(農園まで) 来るのが大変だから次回は申し込まない」、「手入れが届かずできが悪かった」という意見もあり、たとえ「遠足(あるいはピクニック)として楽しい」ことは事実としても通園耕作には限界があることがうかがえる。

3) 畑仕事や家庭での園芸の経験 (問 3, 問 14)

過去に畑仕事の経験をもつ人(63.1%)は今回初めての人(35.3%)より多かった。また家庭で園芸をやっている人(82.8%)はやっていない人(17.2%)よ

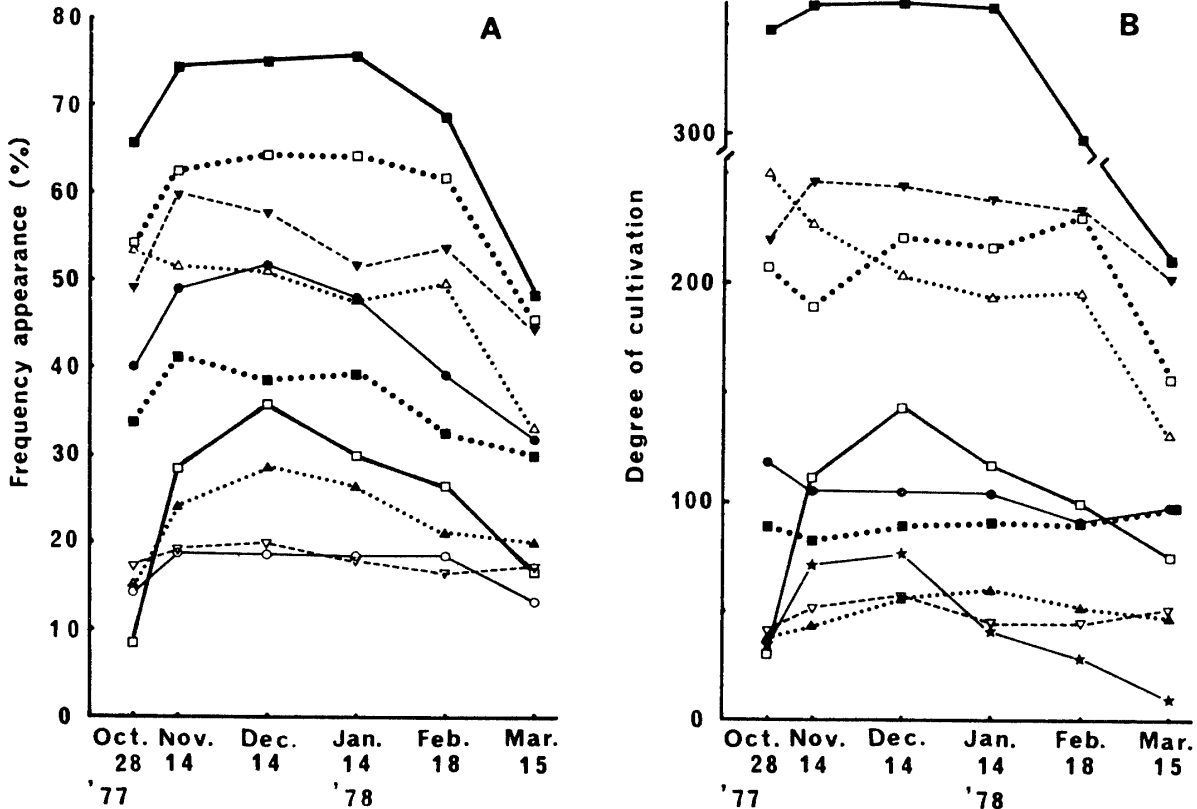


Fig. 4. Changing of the frequency appearance (A) and of the degree of cultivation (B) of the 10 plants mostly cultivated on the Shimin-Noen (Residents Farm).

■—■ Daikon, □····□ Horenso, ▼---▼ Takana, △····△ Hakusai, ●—● Shungiku, ■····■ Negi, □—□ Tsukena, ▲····▲ Retasu, ▽---▽ Kanran, ○—○ Wakegi, and ★—★ Kabu.

Table 2. Sex and age of the people who mainly worked in the Shimin-Noen (Residents Farm)

| Sex | Age (years) | | | | | Total |
|-------|-------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| | 20-29 | 30-39 | 40-49 | 50-59 | 60- | |
| Man | 2 (1.6) | 21 (17.2) | 24 (19.7) | 13 (10.7) | 11 (9.0) | 71 (58.2) |
| Woman | 3 (2.4) | 11 (9.0) | 21 (17.2) | 11 (9.0) | 5 (4.1) | 51 (41.8) |
| Total | 5 (4.1) | 32 (26.2) | 45 (36.9) | 24 (19.7) | 16 (13.1) | 122 (100.0) |

Numbers in parentheses show percentage.

Table 3. Mode of transportation and time, required to come to the Shimin-Noen (Residents Farm).

| Method | Required time (min) | | | | Total |
|---------|---------------------|-----------|---------|---------|-------------|
| | 0-10 | 11-30 | 31-60 | 61- | |
| On foot | 26 (21.3) | 17 (13.9) | 1 (0.8) | 0 (0.0) | 44 (36.1) |
| By car | 31 (25.4) | 35 (28.7) | 3 (2.5) | 1 (0.8) | 70 (57.4) |
| Others | 1 (0.8) | 3 (2.5) | 3 (2.5) | 1 (0.8) | 8 (6.6) |
| Total | 58 (47.5) | 55 (45.1) | 7 (5.7) | 2 (1.6) | 122 (100.0) |

Numbers in parentheses show percentage.

りも圧倒的に多かった。このように家庭での園芸は経験しても畑仕事を経験していない人がかなり多いことが示されている。

4) 市民農園で栽培した植物およびかねてから栽培したいと思っていた植物 (問 4, 問 7)

アンケートからえた栽培植物は圃場での調査結果とほぼ同じであったが、詳細にみればやや異なる点もあった。これは記憶ちがいや未回答があったことによるものであろう。

かねてから作ってみたいと思っていた作物の種類は出現頻度の高い方から20種をあげると、ダイコン、ハクサイ、カンラン、ハウレンソウ、ナス、トマト、キュウリ、ネギ、レタス、サツマイモ、ニンジン、タカナ、タマネギ、サトイモ、シュンギク、スイカ、エンドウ、カブ、カボチャであり、冬作から夏作に至るまで多岐にわたる。これらのうち冬作物はほぼすべて栽培されたことがわかる。

5) 植物の出来ばえ (問 5) および市民農園耕作上の障害や問題点 (問 6)

「施設がよくととのい」、「土がよかった」こともあって、ともかくよくできたとみる人 (26.2%) とまあまあのできとみる人 (55.8%) ができなかったとみる人 (18.0%) を大きく上まわった。客観的にみても全般的にできがよかったことは先に述べたとおりである。休耕地を借りあげた農園では雑草が多く、除草に泣かされた人が多かったようであるが、連作障害はむしろ少なかったようである。例年がない暖冬だったことも植

物の生育を助けたが、一方では問題点の一つである虫害 (36.1%) をもたらした。

障害や問題点としてもっとも多くの人々が肥料不足 (36.9%) をあげたが、これは主として準備された堆肥の不足を指摘したもので、圃場への施肥量が少なかったことを意味するものとは限らない。

干ばつの被害を 12.3%、病害を 9.0% の人が訴え、その他に霜害、雪害、モグラの害、ウサギ(?) の害、土地がやせていたことなども述べられた。

このように一般的には障害や問題点の原因を耕作者以外に求める声が強かったが、一部には「遠すぎたり」、「多忙だった」ために「十分な手入れができなかった」ことによるものだという反省の声もあった。

6) 農園の利用、とくに面積、期間、再申し込み、その他 (問 10~13)

まず面積については、現在のままでよい 54.9%、もっと広い方がよい 43.4% と前者が後者をやや上回った。

野菜の自給に必要な菜園の面積は 1a と 2a との違い、栽培技術やどの程度を自給と考えるかによっても異なるようである。もっと広い方がよいという回答の多くは経験者によるものであったことから判断すると、市民農園では未経験者を対象とし、しかもできるだけ多くの人に農作業を体験してもらおうという主旨からみても、20m² という面積は一応妥当な線と考えられよう。

農園の利用期間すなわち入園期間については、もっ

と長期にして欲しいという希望が圧倒的に強かった。具体的な入園期間としては「せめて1年間」という声が多く、一部には数年間を希望する人もあった。これらの中には「有料でもよいからもっと長期間」を希望する声も少なくなかった。

今回「せめて1年間」という声が強かった理由の一つは、10月に開園したばかりなのに年度内には閉園しなければならなかったという行政上の問題である。このためわずか半年間しか入園できず、したがって「夏場のやさい」、そのほか「希望する作物をつくれぬ」とし、「せっかく植えた豆類が大きくなっているのに収穫できないままに終わってしまう」。1年のうちでもっとも条件の悪い冬場だけしか作れなかった、「初めての作物に失敗したので次作に期待したが、期間が足りなかった」、「せっかく肥料を入れたのに、次の人の作物の肥料になってしまう」、「やっとな雑草をとりのぞいて安心してうえられるようになったのに、もう自分は栽培できない」などの不満が生じ、「せめて1年間」あれば、「計画的に」「希望の植物をうえることができ」、「十分に肥料を与えることができる」という希望を抱かせたものであろう。と同時に「遠くてもよいから自分の畑が欲しい」、「分譲を検討して欲しい」というように、自分の意のままに栽培管理のできる土地が欲しいという希望が示されている。そしてそれが不可能なら「有料でもよいから農園を貸与して欲しい」ということになろう。

なお、昭和53年度は入園期間1年で開園されているので、その入園者から入園期間についてどんな意見がだされるかは興味深い。

以上のような背景もあって、昭和52年度の入園者の90%以上が再申し込みを希望した。これに対して市では昭和53年度の募集にあたって、「できるだけ申し込みを遠慮して欲しい」と要望するにとどめた。

栽培植物の種類に関して「花はダメ」という農林省の見解が入園者に伝えられたことははじめに述べた。これに対して約15%の人が野菜以外のものもつくらせて欲しいと希望し、「作物の種類は自由に作らせて欲しい」、「花き類の栽培を認めてもらいたい」という。実際のところ、農作業体験のための“農園”に農作物の一つである花類をつくってなぜ悪いのか不可解である。

7) 市および職員への希望や意見(問9, 問12, 問13)

a) 市民農園の企画について: 市に対しては「大変よい試みである」とし、また「非常によい企画」だから

「今後も続けて欲しい」とし、市民自身に対しては「もっと利用して」「つくる喜びを知って欲しい」という意見があった。そして「有償で結構」だから市内に点在する「休耕地を沢山の人が利用できるようにして欲しい」と市民農園の拡大を要望するなど、市民の期待のほどが示された。

b) 市民農園の施設や設備について: 水道、農具、肥料が準備されていて「申し分ない」とし、このような「農園を使えてよかった」という意見がある一方、水道に関しては「もう2,3か所欲しい」という声もあった。水道からもっとも遠い圃場は50m以上も離れており、ホースの使用は禁じられていたので、この間ジョロあるいはバケツで水を運ぶことは大変な作業であったと推察される。また平日には管理人がタンクを一杯にして水道を止め、土曜・日曜にはこれを開くことになっていた。しかし乾燥が続いた開園当初にはタンク2個の水では足りず、「とても困った」とし、「平日にも水道を開けて欲しい」という要望が強く、後には管理人の裁量で平日にも利用できるようになった。格納庫についても水道と同じ処置がとられた。これらの処置は利用者の好評を博し、懸念された水の浪費、農具の盗難、破損はほとんど起こらなかった。

このほか、市民農園の置かれた場所は「緑と太陽に満ちた素晴らしい場所であった」という感想があった。また、農園への砂利道の「中央が高く」なり、「車体当って困った」という意見があり、昭和53年度開園までに砂利を入れて整備された。

c) 指導および相談について: 堆肥の配分に関する不満がもっとも多く、「堆肥の増加」、「各戸均等割」などが提言され、「有料でもよいから(どんな肥料をとるか)希望をとって欲しい」という声もあった。なお昭和53年度には堆肥にかえて配合肥料1袋が入園者に支給された。

栽培管理に関する指導については、「時季別栽培やさいの種類、注意等を提示して欲しい」という初心者の方の声や「(鹿児島県立)少年自然の家では先生方の指導でとてもスムーズにいった(栽培がうまくいった)が、ここでは苗や肥料をどの程度、いつ必要かわからなかった」、係員が巡回する平日には圃場に行ったことがない(行けないのが通例であろう)というようなことから、「まったく指導してくれない」、「もっと指導してほしい」という不満があり、また「指導の日を知りたい」、「月に1回位」あるいはできれば「日曜日に」「現場をみて問題点を指導し」たり、「耕作者との話しあいをもって欲しい」、「月に2,3回の講習会」な

どが要望された。しかし同じ初心者でも「となりの人がうえている植物をうえ、杖立てをまねた」、「他の人達の植え方などをみて非常に参考になった」という人もいれば、「上手にできておられる方に教わりたかった」とし、実際にたずねて「教えてもらった」人もいた。

種苗についても、種子の無料配布に対して何はともあれ「有難かった」という感謝はともかくとして、「種の一袋は多いから半分または少々の苗を世話して欲しい」、「有料でもよいから希望をとって購入して欲しい」、「種子よりも苗がよかったのでは？」など、市に依存する意見が多かった。

“アイディア鉢”の調査でも明らかのように³⁾、園芸活動を通じての創意工夫が人間性回復に大きな役割を果たしていることを考えると、申し込んだ時と同様耕作に対して積極性を入園者に期待したい。

このほかに「耕作者名簿を作成して欲しい」という希望や「殺虫剤などは一緒にするように計って欲しい」という意見もあった。耕作者には無農薬の自然やさいをたのしみにしている人も多いので今後慎重に検討する必要があるだろう。また「T農園の中央部が低い。夏期には水はけのために整理が必要なのではあるまいか」、「連作障害を防ぐため作付品種の図面を義務づける必要があるのでは」という提言もあった。

8) 市民農園への期待および実態と感想にみる家庭園芸の本質 (問 8, 問13)

まず多くの入園者が土や緑や日光を含めて自然に親しみたいと希望していた。たとえば「庭(土)いじり」をしながら「植物をつくる」「園芸(耕作)」を好きだからそれをしたい。しかし現実にはアパート暮らしで「庭」や「土地」はないし、たとえ土地つきの家であっても、その庭は「きわめて狭く」「日当たりが悪い」、またその「土が悪く」、「酸性となって(作物が)できない」状態であるなど、都市における住宅事情が如実に反映されている。したがって「鉢物はつくったことがあるが、畑は耕したことがない」。だから「広い土地・畑で」「やさい」だけでなく「その他いろいろな植物を植えてみたかった」とし、そのために「菜園を貸してくれる人があればと思っていた」、また「野外で土に接する機会が欲しかった」などである。

そして「自然に恵まれた郊外」での農園耕作は個人だけでなく、家族を含めての「余暇利用」、「リクレーション」として好適であり、しかもそこで「身体を動かし」て「働くことは健康によい」と期待する。たとえば、「時間をもて余さないですむ」、「勤めから帰

って何かをしたかった」、「子供が大きくなったので土に親しみながら何かをつくってみたかった」、「(農園は)郊外にあるので子供や孫と遠足気分にあひたれる」、「家族で土や自然に親しむよい機会である」、「働くのは健康によい」などはその具体的表現といえよう。

半年間の耕作体験のうち耕作者は、「畑に行けるたのしみはピクニックに行ったと同じであった」、「遠足をたのしんだ」など「余暇利用に最適であった」と述べ、さらに、「日光と空気と土いじり、三要素を満喫できた」、「畑に出ていることが無性にたのしかった」、「郊外の空気とのんびりさに気持ちが和らいだ」など、ゴミゴミしたコンクリートジャングルやアスファルト砂漠からの脱出を素直に喜んでいる。このようにして農園に出かけて「土をいじりながら身体を動かして汗を流す爽快感」は素晴らしく、「ストレス解消」、「日曜日などよい運動」であり、約70%の人が健康によかったという。

さらに入園者は「新鮮な」「農薬のない」「無化学肥料の」「安心して食べられる」、しかも「ビニールハウスで(できたもので)なく、太陽の恵みを受けた」いわゆる「自然食品」を食べたいなど、無公害の新鮮な野菜を望んでいる。もちろん一部には「安い野菜を自給」し、「生活費をうかす」ことを期待した人も居た。

しかしながら「病虫害」その他「いろいろな障害で予期した収穫はえられなかった」。たとえば、「200円の苗を買ったのに虫に食べられてしまった(収穫ゼロ)」、「水のやりすぎで生長が思わしくなかった」、「手間をかけて世話したのにごくわずかの野菜しかできなかった」など、「なかなか思うように(作物は)できず」、「買うよりも高い野菜になった」。このような体験から「園芸作業のむつかしさ」、「農家の労力をしみじみ考えさせられた」とし、やや大げさではあるが、「農業の苦労がわかりました」など、野菜づくりのむつかしさを知ったという回答が約60%に達し、この事業の目的はある程度達成されたとみることができよう。

ところで上に述べてきたように、市民農園の耕作活動のなかに、太陽と緑と新鮮な空気、土のような自然環境、さらには新鮮な野菜と健康を期待し、それを得て喜ぶ人間像を見出すことができる。端的にいえば、必要なものあるいは欲しいものを感じとりあるいは手に入れて喜ぶ人間の姿である。たとえば、人間は光を感じとり植物の緑を見る。山野に食べ物を求めてこれを蒐集し、狩り、漁る。花を鑑賞し、買物をする。これらはすべて人間がその対象に対して一方的に行う“猟る”行動である。この行動を、意志をもって行い、完

成したとき達成感をえ、ここに喜びを味わう。これを“猟る喜び”と表現すれば、家庭園芸の本質の一つとして、まずこの“猟る喜び”をあげることができる。

先に都市の家庭園芸を調査した報告²⁾は、園芸ブームを、都会人の自然回帰の営みと分析したが、これは猟る対象としての自然を奪われた都会人が、これを求めて狼狽する様子を表現したものと見えよう。そしてこのような自然回帰の希求を鹿児島市民にもみることができることは上に述べたとおりである。

一方市民は「植物を育てる喜びを味わいたい」、「野菜づくりをたのしみたい」、「自分で植物の種子をまき、手入れをし、収穫してそれを味わいたい」と希望し、しかもこの“植物を育てる”行動を媒介として、“子供を育てる”ことまでも考えていた。たとえば「子供の情操教育」、「自然に親しませ」ながら「畑仕事を教え」、「野菜を植えて収穫するまでの体験をさせ」、「食べ物をつくる苦勞」と「自分のつくった野菜をとって食べることがどんなにたのしいかを味あわせたい」、またこうして「野菜の種類」、「野菜と雑草の見分け方を教えることができる」し、「自分でやれば何でもできることを体験させ」られるというのである。

そして前述のように、たとえ農園の収穫物が市販品のように立派ではなかったとしても、まあまああるいはそれ以上のできだったと80%以上の方が自評し、「自分の」あるいは「子供と共に」「つくった」新鮮な、自然の野菜を「自分で収かくするのはとても嬉しかった」し、この野菜は「何となく味までもちがって美味しく感じた」、「自分でつくったものを食べるうれしさは何ともいえません」、「近所の人にできたやさいをわけてあげて喜ばれた」など、手作りの作物は買ったものとはちがった味わいをもつものであることが示された。

また子供達は農園を「素足でかけまわり」、「大根抜きを喜び」、「今まで口にしようとしなかったものを『家の野菜だ』といって口にできるようになった」など、子供が土いじりや野菜づくりに興味をもち、『『早くゆこう』と親をさいそくするようになった』り、『『どうしてよそのようによくできないか』と批判された』例もあるように、「育てる(耕作する)喜びを教え、味わわせる実践教育に役立った」。

以上のなかに、作物だけでなく、人間の子供をも含めた、生きものを育てること自体に大きな喜びを見出す人間像を読みとることができる。このように生きものの世話をし、その生長を助けることに喜びを感じることを、これを“育てる喜び”と表現すれば、これもまた

家庭園芸の本質の一つに数えあげることができよう。

先に述べた“猟る喜び”が、対象を一方的に感知したり獲得することによってえられるのに対して、“育てる喜び”は、対象としての生きものへの働きかけとそれに対する対象の反応との協関の連続のなかでえられる。しかも育てる行動は対象の生長のペースにあわせなければならないこと、したがって対象は決して働きかける人の意のままにはならないこと、さらに長い時間におわたることに主な特徴があり、対象をその場で、意のままに得るところの猟る行動とは本質的に異なる。

たとえば花を育てて鑑賞することを例にとってみよう。種子をまき、花を咲かせるまでにはかなりの日時を要する。この間、植物の反応(生長)をみながら手入れをし、その植物がつけた花をわれわれは鑑賞する。意のままに枯木に花を咲かせる妙薬はまだ見出されていない。いずれにせよ、ここに述べた一連の行動のなかに“育てる喜び”があり、花屋で買った花を観賞する“猟る喜び”とは本質的に異なる。

このような“育てる喜び”を入園者の一人は次のようにいう。

「種をまいて、芽が出てくるのが楽しみで、又、芽が出てくれば、早く大きくなってくれーと次から次へと楽しみが増し、畑に行くのが嬉しかった」。

このように「農園に行くたびに野菜が大きくなるのを見ることはたのしく」、これを期待して「休日・日曜日ごとに朝早く起きて出かけた」。そして「できた野菜を収穫するのもまたたのしかった」し、さらにそれを食べる嬉しさはなおさらであったろう。

また、家庭での園芸愛好家はインタビューに答えて“育てる喜び”を次のように表現した。「かわいがった効果があって生気にあふれ」、「小さくても花や実をつける」と「たまらなくうれしくなる」。また「育てると愛情がわいてくる」し、「これは子供を育てるのと同じともかわらない」。したがって「枯らしたりしたときは最高に悲しい」。

以上のように、市民農園を含めた家庭園芸の本質として、“猟る喜び”と“育てる喜び”とをあげることができる。これらを、次にあげた入園者の文章から生き生きと感じとることができるのではあるまいか。

素足で畑をたがやし 種子をまき
芽がでて一日一日と大きくなり
青々とした野菜を 自分が作った……
という喜びで一杯!

要 約

昭和52年度に開園された鹿児島市民農園を対象に圃場を観察して耕作の実態を把握し、あわせて入園者に対するアンケート調査結果をもとに、家庭園芸の本質を解明する試みを行った。

農園の耕作者は壮年層が多く、また自家用車で通園した人が圧倒的に多かった。耕作者の約35%は畑仕事を初めて経験した。

入園期間中に全圃場で40数種の植物が栽培され、その大部分は野菜であった。このうち、ダイコン、ホウレンソウ、ハクサイ、タカナは50%以上の入園者によって植えつけられた。

作物のできは必ずしも良好とばかりはいえなかったが、入園者はこの耕作をとおして農作業のむつかしさを実感するとともに、植物を育てるたのしさを体験した。

また入園者は自然のもとで働く健康さや新鮮な野菜がえられたことを喜んだ。

以上のような市民農園の実態から、市民農園を含めた家庭園芸の本質として“甞る喜び”と“育てる喜び”とが確認された。

謝 辞

市民農園の管理・運営およびアンケート調査については、鹿児島市経済局農林部をはじめ関係者の方々のご教示とご協力をえた。記してお礼を申し上げます。また、英文の校閲をいただいた小篠敏明助教授(鹿大教育学部)およびD. Hendrickson氏(鹿児島純心女子短大)に謝意を表する。

文 献

- 1) 朝日新聞社：園芸マーケットの分析と資料, 1-159(1975)
- 2) K.K. クラレ：都市ホワイト・カラーの家庭園芸, うちの科学情報(調査編)昭和50年4月-2, 1-10(1975)
- 3) 松尾英輔：家庭園芸に関する研究 1. アイディア鉢について, 鹿大農学術報告, No. 28, 229-241(1978)

Summary

The Kagoshima Shimin-Noen (Residents Farm) is one of the governmental undertakings managed by the Ministry of Agriculture and Forestry, which started in 1977, with the object of making the consumers experience farming on the spot. To accomplish this purpose, three cities including Kagoshima City and one town were entrusted with this program. In complying with this trust, Kagoshima City opened three farms, each one of which consisted of about 50 fields of 20 m². These fields were lent out to citizens without charge for the period from October 13, 1977 to March 25, 1978.

To find the nature of home gardening including the cultivation of the farms, the author observed the process of the cultivation at the farms for 6 months and investigated by the questionnaire method about the citizen-farmers' hope, expectations for the farm and their actual experience.

Most of the citizen-farmers were men in the prime of the life, and came to the farm by car, not on foot. To about 35% of the citizen-farmers, farming was their first experience. They were enthusiastic in growing plants, so enthusiastic that some of them even watered the fields right after a rainfall.

More than 40 plant species were cultivated on the farms, most of them being vegetables. In particular, big white radish, spinach, *Chrysanthemum cornarium* (Shungiku) and leaf mustard were planted by more than 50% of the citizen-farmers. The quality of the farm produce was not always so good as that of the commercial goods, and its price not so cheap, because of the insects' damages, diseases, and/or insufficient nutrients. Thus, the citizen-farmers learned by experience the difficulty of farming.

In spite of this, the citizen-farmers did enjoy their farming very much. Because 1) the farming in the suburbs gave them a pleasant break in the natural environment blessed with sunshine, blue sky, fresh air, green plants, etc., the appreciation of which they had been longing for, 2) the farm working provided them with a good physical exercise, 3) it gave them a precious time and place for child education and a good human relationship among family members, as well as fresh vegetables, and 4) the raising of plants itself was a great pleasure for the citizen-farmers.

The above factors can be grouped into 2 characteristic features of home gardening under the heading of 1) Karu-Yorokobi (Bliss of Acquiring Aimed Objects) and 2) Sodateru-Yorokobi (Bliss of Fostering Lives).